



群馬県立土屋文明記念文学館
Gunma Prefectural Museum of Literature
in Commemoration of Bunmei Tsuchiya

平成二十三年度

「小学生の短歌教室

「伝統的な言語文化に親しむ」

副読本

2011/10/31 (11/18 版)

(c) 群馬県立土屋文明記念文学館

はじめに

三十一文字（みそひともし）

五七五七七の三十一文字（音数）のことを「みそひともし」といいます。

字余り、字足らず

五七五七七はそれぞれ、初句（しよく）／二句／三句／四句／結句（けつく）と呼ばれ、決められた音数より多いことを「字余り」、少ない場合を「字足らず」といいます。

初句／三句をまとめて「上の句（かみのく）」、四句と結句をまとめて「下の句（しものく）」といえます。

土屋文明「三井埠頭を邸宅の如しなど見居る時石炭砂糖台湾米のトラック続きで出でぬ」（『六月風（ろくがつかぜ）』（みついふとうを ていたくのごとしなど みおるとき せきたんさとうたいわんまいの とらつくつづぎていでぬ）

【意味】（東京湾の）三井埠頭の建物を大きな船のようだなどと思つて見ていたら、石炭や砂糖や台湾米をのせたトラックが続けて出て行つた。

『万葉集』と「万葉仮名」

山部赤人（やまべのあかひと）「田兒之浦從打出而見者真白衣不盡能高嶺尔雪波零家留」（『万葉集（まんようしゅう）』（たこのうらゆ うちいでてみれば ましろにぞ ふじのたかねに ゆきはふりける）

【意味】田子の浦（今の静岡県富士市にある港）から（沖にこぎ）出てみたら、真っ白に、富士山の高い嶺に雪が降っている。ひらがなができる前、中国から来た漢字しか文字を持たなかった時代の日本人は、漢字の意味には関係なくその音を借りて日本語を書く方法を生み出しました。日本で一番古い歌集である『万葉集』はその代表で、そこから名前を取つて、これを「万葉仮名」といいます。一つの音に対していくつか漢字の当てはめ方があつたので、後の時代にはどう読んで良いか分からなくなつたものもありましたが、今ではだいたい読めるようになりました。

『万葉集』の時代より後になって、漢字かな交じり表記の短歌がほとんどになり、今はそうした書き方にならつて、『万葉集』の歌も「田子の浦ゆ打ち出て見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」のように表されます。でも「万葉仮名」の見た目のインパクトはすごいですね。

短歌に詠む内容

観察したこと(写生)

正岡子規「くれないの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる」(『竹乃里歌(たけのさとつた)』)
(くれないの にしゃくのびたる ばらのめの はりやわらかに はるさめのふる)

【意味】紅色の二尺(約六十㎝)に伸びたバラの芽の針のようなとげがやわらかく感じられる。やわらかな春雨が降っている。観察したことをそのまま書くことを「写生」といいます。普通バラのとげは固くて痛いものですが、「芽なのでやわらかい」ということと、春の雨がかもしだすやわらかい雰囲気、響き合っているとこの短歌の面白さがあります。

ところで今、「そのまま書く」といいましたが、良く考えてみると本当にそんなことができるでしょうか？言葉と物は同じではありません。物事を観察しながら、じっくりくる言葉はないか、新鮮で素敵な言葉はないか、言葉の組み合わせをどうするか、いろいろ探して考えてみましょう。

短歌という形式を、せま苦しいものと感じるかもしれませんが、この形を借りて考えることで初めて、自分でも思ってもみなかった言葉を探り出すことができます。新鮮な言葉は、新鮮な物の見方を教えてくれます。

自分の気持ち

若山牧水「好かざりし梅の白木をすきそめぬわが二十五歳の春のさびしさ」(『獨り歌へる(ひとりうたえる)』)
(すかざりし うめのしらきを すきそめぬ わがにじゅうごの はるのさびしさ)

【意味】(昔は)好きでなかった梅の白木を、好きになり始めた二十五歳の春、私は歳をとったようでさびしさを感じた。

若山牧水(わかやまぼくすい)は「かなし」「い」「わびし」「い」「さみし」「い」「あわれ」だ、といった感情を、そのまま言葉にして短歌に入れることがとても多い歌人でした。短歌にはこういう直接的な表現もありますが、「悲しい」といわずに「悲しさが想像できる写生の歌もあります」。

短歌には、いろいろな内容を取り上げることができます。自然はもちろん、自分の体験や気持ち、政治、経済、文化、スポーツ、食べ物、等々……。ただどんな時も、たんとと説明するのか、自分の気持ちを込めるのか、自分の気持ちを込める時は、「悲しい」というような言葉を直接使うのか、使わないのかなど、いろいろ考えてみると表現の幅が広がります。

群馬が生んだ歌人・土屋文明（文化勲章（ぶんかくんしょう）受章者、名誉県民（めいよけんみん））
土屋文明（一八九〇—一九九〇）は、群馬県西群馬郡上郊（かみさと）村（今の群馬県高崎市保渡田（ほどた）町）に生まれ、
一九八六（昭和六十一）年には文化勲章を授与されて、群馬県名誉県民にもなった人です。百歳まで生きて、歌壇（かだん）、短
歌の世界のこと（）の長老として活躍しました。土屋文明については、県立文学館のホームページに「土屋文明ってこんな人！」
というページができますから、そちらも是非みてください。

文明の短歌を一首だけで読む、詞書と合わせて読む、歌集として読む…

皆さんが読む教科書は、ほとんどの場合スペースの関係で、一人の歌人について一首ずつしか、短歌が紹介されていないと思
います。ですが、短歌が一首だけで発表されることは、あまりありません。雑誌に数種（かず）数十首ぐらいまとめて発表され、それ
が後で歌集にまとめられる場合がほとんどです。

土屋文明の場合、数百〜千数百首を一つの歌集にまとめて、亡くなるまでに十二の歌集、亡くなった後に一つ歌集が出版され
ました。（これは新しい短歌をまとめて第一歌集、第二歌集…と数えていく歌集のことで、過去に作った良い歌を、いくつかの
歌集にまたがって選び直して出した歌集などは含んでいません。）

歌集の中では、いくつかの短歌をまとめて、その前に「詞書（ことばがき）」と呼ばれる、状況を説明する言葉や文章が入り
ます。短歌には、一首だけ抜き出して読む魅力もあれば、詞書、歌集といった単位でまとめて読む魅力もあるのです。

土屋文明 「小工場に酸素溶接のひらめき立ち砂町四十町夜ならむとす」 『山谷集（さんこくしゅう）』

（しようこうじょうに さんそようせつの ひらめきたち すなまちしじゅちちよう よるならんとす）

【意味】（東京市城東区（当時）の）小工場に酸素溶接の（光が）ひらめきたち、砂町四十町は夜になろうとしていて。

（砂町は現在の東京都江東区にある地名。）

これは一九三五（昭和一〇）年に出版された第三歌集『山谷集』に載っている八五二首の中で「城東区」という詞書でまとめ
られた十一首のうちの一（ひと）首です。はじめ『短歌研究』という雑誌の一九三三（昭和八）年三月号に発表されました。

東京の下町の小さな工場で、金属を高い温度にして溶かしてつなぎあわせる「溶接」作業をしているところを詠んだ短歌です。
土屋文明には、こうした工場などの機械的なものを詠んだ短歌があって、これは当時、とても新しいものでした。

それでは次に、一つの詞書の後に続く短歌を全部読んでみることにしましょう。

土屋文明の第九歌集『青南集（せいなんしゅう）』の中で詞書「私注稿了（しちゅうこうりょう）」に続く五首

宝字三年注しをへたり今ぞ切る三年前のマニラ一本

鉄ペンも得難き時に書き始め錆びしペンの感覚今に残れり

浅葱の枯れて野びるはかじかまり吾が腰抜ける二月近づく

年々の足の立たなくなる二月恐れて冬のひよこを買はず

金柑の貝殻虫を落したり温かき日はただたのしくて

（ほうじさんねん ちゅうしおえたり いまぞきる さんねんまえの まにらいつぽん）

（てつペンも えがたきときに かきはじめ さびしペンのかんかく いまにのこれり）

（あさつきの かれてのびるは かじかまり わがこしぬける にがつちかづく）

（としどしの あしのたたなく なるにがつ おそれてふゆの ひよこをかわず）

（きんかんの かいがらむしを おとしたり あたかきひは ただたのしくて）

【意味】

天平（てんぴょう）宝字三年（759.2.27-760.12.22）の歌に、自分の意見を付け終わった。今こそ三年前に手に入れたマニラ産たばこの封を切って一本吸おう。

この「私注」は鉄ペン（ペン先が鉄でできた万年筆）を手に入れることが難しかった時に書き始めた。（新しいものが買えなかったので）さびたペンで書き続けたが、今も（手に）残っている。

（ネギの一種である）あさつきが枯れて、野びるが（寒さに）かじかんだようになって、私の腰が抜ける二月が近づく。毎年足が立たなくなる二月が心配で、（世話ができなくなることがないように）冬のひよこを買つことはない。

キンカンについたカイガラムシを落としていたりして、暖かい日はただたのしい。

詞書は、文明が『万葉集』について自分の意見を述べた『万葉集私注』という本（全二十巻）の原稿を書き終えたという意味です。面白いのは、直接「私注」と関係があるのは最初の二首だけで、あとの三首は、その時期の一般的なことを詠んでいることです。こうすること、「私注」を書くことが文明の普段の生活の中に深く入り込んでいたことや、その時間の厚みのようなものが伝わります。一首ずつは地味でも、歌集を読む流れの中での、まとまりとしての魅力を感じることができるのです。

また、字余りがかなりあることに気づきましたか。文明は字余りが多い歌人で、五七五七七とは違うリズムをしばしば使いこなしています。皆さんも五七五七七以外にも気持ちのいいリズムがないか、探してみてもいいですね。

言葉のインパクト

固有名詞

源実朝「時により過ぐれば民の嘆きなり八大竜王雨やめさせたまへ」（『金槐和歌集（きんかいわかしゅう）』（ときにより すぐればたみの なげきなり はちだいらゆうおう あめやめさせたまへ）

【意味】時によつては、過ぎると人民が嘆くことになるので、（雨の神様）八大龍王よ、雨をやめさせてください。

鎌倉幕府の將軍であつた源実朝（みなもとのさねとも）が詠んだ歌です。日照りでも大雨でも困つてしまふ民を思う將軍の大きな気持ちを感じられます。この「八大竜王」のように漢字が長く連なつた固有名詞が短歌に入ることは、当時としては珍しいことでした。実朝は短歌の音、リズムに執着した歌人として知られていて、明治以降の日本において、大変高く評価されました。

擬音語・擬態語（ぎおんご・ぎたいご、オノマトペ）

土屋文明「ツチャククウフクと鳴きし山鳩はこぞのこと今はこゑ遠し」（『山下水（やましたみず）』）

（つちやくん くうふくと なきしやまばとは こぞのこといまは こえとおし）

【意味】土屋君空腹、と鳴いているように聞こえた山鳩（がいたの）は、去年のことで、今はその声も遠い（記憶の中だ）。

カタカナの繰り返しなどで音を表した言葉が擬音語、動きや様子を表した言葉が擬態語です。あわせてオノマトペといひます。

「ツチャククウフク」は擬音語です。「ワンワン」とか「ニヤンニヤン」のように、よく使われるものではなく、山鳩の声を表現するために文明が独自に考え出したものです。現代の短歌でも、普通には使われていないオノマトペを使うことが良くあります。皆さんもオノマトペを自分で考え出すと、他の人にはまねのできない、いきいきした短歌が作れるかもしれませぬ。

外来語・記号など

インパクトのある言葉というのは他にもたくさんあります。例えば外国の言葉です。カタカナが普通ですが、多くの日本人が分かり、さらにそうすることで面白い効果があるなら、例えば「GUNMA」のように、アルファベットで書き表すことだって禁止されていません。塚本邦雄（つかもとくに）にお、一九二〇（二〇〇五）という歌人は、短歌の中に「***」という記号を入れました。音にならない記号を入れることさえ、現代の短歌ではあり得るのです。

皆さんも、ふだん使わない言葉を探したり自分で作つたりしながら、短歌を詠んでみませんか？

書き方の自由

分かち書き

石川啄木（『一握の砂』）

友がみな我よりえらく見ゆる日よ

花を買い来て

妻としたしむ

（ともがみな われよりえらく みゆるひよ はなをかいきて つまとしたしむ

『いちあくのすな』）

【意味】友だちがみんな自分より偉く見える日は、花を買ってきて、

妻と親しく（仲良く）過ごす。

石川啄木（いしかわたくぼく）の『一握の砂』はすべて三行分かち書きの、形の上でも新しい歌集でした。

ひらがな（一字空け）

會津八一「あめつち に われ ひとり めて たつ ごとき この さびしさを きみ は ほほゑむ」〔南京新唱〕

【意味】空と大地の中で、私一人いて立っているように感じるこの寂しさを、君（仏像）は微笑んで（なぐさめて）くれる。

漢字にはかたい印象、ひらがなにはやわらかい印象があります。會津八一（あいづやいち）は、ひらがなだけの短歌をたくさん作りました。単語の間を一字空けることも特徴です。南京新唱（なんきょうしんしょう）は奈良の新しい歌という意味です。

句読点

釈道空「葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり」〔海やまのあいだ〕

（くずのはな ふみしだかれて いろあたらし このやまみちを ゆきしひとあり）

【意味】葛の（赤紫色の）花が踏まれて、新鮮な色が見えている。この山道を歩いていった人がいる。

句読点（「、」と「。」）は、明治以降になって、広く使われるようになりました。短歌の世界でも、句読点が入ると読むリズムが分かり、また見た目のアクセントにもなります。釈道空（しゃくどうくう）は短歌に句読点を入れることを主張した人です。

多くの短歌は、漢字とひらがながバランス良く混ざり、一行か二行で書かれています。でもいつもそうしなくてはいけない、ということではありません。ただ、短歌をどこかに応募する場合は、条件を守るようにしてください。例えば県立文学館の「小学生の短歌展」みそひとはじめ」で展示するためには、短冊に書いてもらうので、分かち書きはちょっと難しいですね。

県立文学館とは？

群馬県立土屋文明記念文学館は、群馬県と関係がある文学を中心に、本や原稿などの資料を集めて、研究と展示をする施設です。土屋文明が生まれた高崎市保渡田町にあります。

常設展示では「土屋文明・ひとすじの道」として土屋文明の人生と作品を紹介しています。東京の南青山の自宅から移した「移築書斎」もあって、文明が過ごしていた部屋を今も見るができます。展示室中央には「短歌の世界」コーナーがあり、県立文学館が一九九六（平成八）年に開館した時に選んだ「三十六歌人」の人形が、その歌人が詠んだ短歌と一緒に展示されています。この副読本に出てきた土屋文明以外すべての歌人の人形があります。

土屋文明という人に興味を持ちたり、短歌や文学への興味が広がったりした人は、ぜひ県立文学館にも来てみてください。すぐ南には古墳があって、文明も好きだった榛名山をはじめ、妙義山、赤城山もきれいに見ることができます。中学生までは無料です！

〒370・3533 群馬県高崎市保渡田町二〇〇〇
 電話 027・373・7721
 原則火曜日休館
 九時三〇分〜午後五時（入館は四時三十分まで）

